

標 題 : Multidimensional Impact of Mediterranean Diet on IBD Patients.
炎症性腸疾患の患者における地中海食事の多次元の影響

著 者 : F. Chicco, et al. (イタリア カリアリ大学 医学・公衆衛生学部)

掲 載 誌 : Inflamm Bowel Dis. 2021 Jan 1; 27(1): 1-9.

要 旨 :

背景と目的 : 脂肪組織の蓄積および非アルコール性脂肪肝疾患(NAFLD)による栄養不良は炎症性腸疾患(IBD)と関連する状態である。

内臓脂肪および NAFLD 関連の肝機能障害は、両方とも腸炎を悪化させる。地中海食事(Md)は肥満および NAFLD の両方を改善すると示されているので、この研究の目的は、栄養状態、肝臓脂肪症、血清脂質組成、臨床での疾患活動性、および生活の質(QoL)に対する地中海食事の影響を炎症性腸疾患の患者で分析することであった。

方 法 : 炎症性腸疾患、クローン病(CD)と潰瘍性大腸炎(UC)の両方の患者が、地中海食事に6カ月間従った。

彼らの体格指数(BMI)、体組織組成、肝臓の脂肪症と機能、血清脂質組成、臨床での疾患活動性、および炎症性バイオマーカー(C-反応性タンパク質および糞のカルプロテクチン)を開始時(T0)に収集して、6カ月後(T180)に得た値と比較して地中海食事の影響を評価した。

結 果 : 炎症性腸疾患の患者 142 人、UC84 人と CD58 人が、地中海食事に6カ月間従った。

180 日目(T180)に、食事を順守した CD および UC は BMI(UC -0.42 , $P=0.002$; CD -0.48 , $P=0.032$)およびウエスト周囲(UC -1.25 cm, $P=0.037$; CD -1.37 cm, $P=0.041$)を改善した。

さらに、すべての段階の肝臓脂肪症を患う患者の数は、食事介入後に両方のグループで有意に減少した (UC T0 で 84 人中 31 人[36.9%] 対 T180 では 84 人中 18 人[21.4%]、 $P=0.0016$; CD T0 で 58 人中 27 人[46.6%] 対 T180 では 58 人中 18 人[31.0%]、 $P<0.001$) 。

最後に、食事の6カ月後には不変の治療中の UC および CD の患者は活動性疾患が少なく (UC T0 で 59 人中 14 人[23.7%] 対 T180 では 59 人中 4 人[6.8%]、 $P=0.004$; CD T0 で 51 人中 9 人[17.6%] 対 T180 では 51 人中 2 人[3.0%]、 $P=0.011$) そして炎症性バイオマーカーの上昇も少なかった。

地中海食事は UC と CD の両方で生活の質(QoL)を改善したが、血清脂質組成も肝臓機能も食事によって変わらなかった。

結 論： 栄養不良関連の数値および肝臓脂肪症の有意な減少が、地中海食事の採用に基づいた短期間の食事介入後に CD(クローン病)と UC(潰瘍性大腸炎)の両方の患者で観察され、そしてこのことは疾患活動性および炎症性マーカーの自然な改善と関連した。

キーワード： 地中海食事、炎症性腸疾患、肝臓脂肪症、生活の質

© (著作権) 2020 クローン病・潰瘍性大腸炎一財団法人。クローン病・潰瘍性大腸炎一財団法人の代理としてオックスフォード大学出版局が発行した。
